

今村彩子さん 映画監督 Studio AYA 代表



ドキュメンタリー映画を
作ることが自分自身を
見つめることにもつながった

なでしこ

Power of Nadeshiko

名古屋在住の「きこえない映画監督」今村彩子さん(Studio AYA代表)。これまで制作したのはショートドキュメンタリーも含めて30作以上。劇場公開された5作は、日本各地での上映会が今も続いている。映画上映後の今村さんと観客とのトークセッション開催も多く、講演会に呼ばれることも多い。現在、大学の講師としても活躍中だ。

映画監督、大学講師として活動

今村さんは大学在学中からドキュメンタリー映画を撮り始め、四十代となったこれまでに制作したのはショートドキュメンタリーも含めて30作以上。劇場公開されたのは、「珈琲とエンピツ」「架け橋 きこえなかった3.11」「Start Line (スタートライン)」「友達やめた。」「きこえなかったあの日」の5作。「きこえなかったあの日」は、2021年の「文化庁映画賞(文化記録映画部門)」を受賞している。

今村さんは映画監督として全国各地の上映会でのトークセッションや講演会を行うほか、名古屋学院大学、愛知学院大学などで講師歴もあり、現在は、愛知大学豊橋キャンパスでメディア芸術専攻の講師をしている。

「きこえない人」に対する考え方が違うアメリカ

今村さんは生まれつき耳が聞こえない。幼少期は、友達と遊ぶより、言葉を覚えることに時間を割いた。母親がつきっきりで今村さんに教え、家の中には至る所に物の名前(テーブル、イスなど)が書いてあるカードが貼ってあった。小学時代、父親が「娘が家族と一緒に楽しめるように」と洋画の字幕付きビデオを借りてくれた。これが、今村さんが映画に興味を持つきっかけになった。

愛知教育大学の在学中、「ダスキン愛の輪基金障害者リーダー海外研修派遣事業」の18期生として、アメリカの大学に留学。これが大きな転機となった。映像制作の技術以上に学

んだのは、アメリカの「ろう文化」だった。留学したカリフォルニア州立大学ノースリッジ校は約2万人の学生の中で、きこえない学生が250人もいた。こうした環境で生活しながら、「アメリカのろう者に対する考え方は日本とは全く違う」と実感していく。

日本では「きこえない人」を、治療対象として「耳がきこえない」という医学的見地から周囲が対応する。しかしアメリカには、障害を持つ人が社会に完全に参加できることを保証した「障害を持つアメリカ人法」があり、「障害を持つ当事者の権利を保障するのが当然」という考えで、周囲が動く。

また英語の「DEAF」は、日本語では「ろう者」と訳されるが、アメリカ人は「DEAF」としての誇りがあり、「ろう文化」もある。考え方は、日本とはかなり違っていった。

映画編集時間は膨大に

今村さんはアメリカ留学から帰国後、「自分のアイデンティティは、ろう者」と、手話を用いて声を発しないコミュニケーションだけを行っていた。しかし徐々に苦しさを感じるようになり、自分がどう生きていくか模索するようになる。

そんな中で今村さんは、アルバイト代でビデオカメラを購入し、ドキュメンタリー映画の制作を始めた。卒業後は映像制作に関する仕事や大学講師をしながら、映画監督の仕事も続けて今に至る。